

『信平とみ緒』

鈴木信平

鈴木み緒

長崎市郊外の農家。離れ。

み緒はテレビを見ている。箱根駅伝。

信平、母屋から、運び出した荷物を持って来る。

棚やタンス、机の上を整理しながら、

信平「ああ、伝通寺の和尚さまが若和尚と一緒に来るって」

み緒「そう。なんで」

信平「おまいりに」

み緒「あ、おまいりに。なんの」

信平「和尚さまと若和尚が」

み緒「和尚さまと若和尚が。なんでおまいりに来るの」

信平「おまいりに」

み緒「……戻って来たって？若和尚」

信平「もう、いつのこと戻って来てるよ」

み緒「あら、そうでした？」

信平「和尚さま、佐竹さんの法事で来て、うちに寄るって」

み緒「ああ、うちに寄るって、佐竹さんの法事のついでにね。和尚さまがね」

信平「そうよ。若和尚も一緒に」

み緒「若和尚も一緒に。え、若和尚も一緒にですか」

信平「そうそう。若和尚は酒は飲めるのか」

み緒「和尚さまが飲めるんだから、飲めるんじゃないの」

信平「おまいりに。酒飲みに来るんじゃないぞ」

み緒「そりゃそう。そりゃそうですよ」

信平「あ、あった、家計簿あった、ここに」

み緒「どこに」

信平「ここに、棚にあった。あったあった」

み緒「そうですか」

信平「どこもここも探したのにここにあった」

み緒「あったのね、じゃ、そこに」

信平「あったんだよ。よく探さないからだ」

み緒「探しました。さんざん探しました」

信平「それでもなかったじゃないか」

み緒「あったんだらいいでしょ、もう」

信平「うん。いい。よかった」

信平「喜びなよ」

み緒「え」

信平「喜びなよ」

み緒「は」

信平「もっと喜んだらいいじゃないか。あんなに探してた家計簿があったんだから」

み緒「薬箱は」

信平「なに？」

み緒「私の薬箱は」

信平「薬箱って。薬箱は机の上」

み緒「ああ」

信平「机の上には薬箱！」

み緒「はいはい」

信平「僕の机の上には僕の薬箱！」

み緒「はいはい」

み緒「そうか。なんか、用意をしなくてね」

信平「うん？」

み緒「和尚さまが来るなら」

信平「うん、若和尚も来るからな」

み緒「お菓子でいいでしょう」

信平「お菓子」

み緒「お菓子がありましたよ」

信平「お菓子くらいあるだろう。どのうちにも一つや二つのお菓子はあるものだ」

み緒「どこにありました」

信平「ああ。立たなくていい。立ったらまた痛むから」

信平「紀子さんがするから、いいよ。もう、まかせないと」

信平（都々逸風に）「も〜う、おうちのお、こと〜は、のりいこお、さん〜にい、まか〜せえな
いとお」

み緒、テレビを見ている。

み緒「それにしても、よく息が切れないねえ。練習してるんだろうね。どんどん走るね。……
この人たちからは富士山は見えるのかな」

信平「選手はね、富士山なんか見てるひまはないんだよ。一生懸命走ってるんだからさ」

み緒「家計簿になに書こうかしら」

信平「ええ？」

み緒「家計簿になにを書いたらいいかしら」

信平「家計簿には、買ったものを書くんだよ」

み緒「これからは買うものもないじゃないですか」

信平「買うものなかったって、日記みたいなこと書けばいいじゃないか」

み緒「ああ」

信平「書くとこあるんだろ、家計簿の下の欄に」

み緒「ええ」

み緒「じゃ、家計簿じゃなくって日記ですよ」

信平「ああ。そりゃ、ま、そうだ。そりゃ、そうだ、確かにそうだ、うん」

み緒「ま、でも、家計簿に書きますね、日記を」

信平「うん。そうだな」

み緒「どうせ、たいしたことは書かないんです。書きます。……書こう書こう。」

信平「そうだよ。これからもいろんなことがあるんだ」

信平「じゃ、鏡台は、向こうに置いたままか」

み緒「え？」

信平「鏡台、持って行かないと捨てるって言ってたから、持って来る」

み緒「もういいですよ」

信平「もういいって？」

み緒「重いから、いいです」

信平「重い。鏡台が重いつてことないじゃないか」

み緒「いや、重いですよ、あれは。引き出しのなかもありますから」

信平「出せばいいじゃないか。どうせなんでもかんでもいっぱい入ってるんだ。この際、整理したらいいじゃないか。それでも重かったら、肇に運ばせるよ」

み緒「肇は改築の準備で忙しいんですから」

信平「なんだ、鏡台くらい。母屋からここの距離だろ。かついで箱根の山越えるわけじゃなし」

み緒「お茶飲みますか」

信平「いいよ、もう、お茶ばかり」

み緒「青山学院は、竹田の下の子が行きましたよ」

信平「うん、もう卒業したよ」

み緒「あら、卒業しました？」

信平「そりゃしたよ、とっくの昔だ。もういくつだい、あの子」

み緒「竹田の下の息子ですよ」

信平「下の息子だって40は過ぎてるよ」

み緒「聞いてませんけどね。卒業したって」

信平「あたりまえだろ。なんでうちに言ってこなきゃいけないんだ」

み緒「親戚ですよ」

信平「遠い親戚だよ」

み緒「遠くないですよ」

信平「遠い近いってことより、いや、親戚だからって、竹田の息子がなんでうちに卒業の報告をするのかな。するわけがない。なんで、そんなことを思うかな」

み緒、立って、テーブルのほうへ。

椅子にすわり、なにか探す。そして、キッチンのほうへ。

信平「なに」

み緒「お菓子かなんか、ないですかね」

信平「ないって」

み緒「紀子さんに言って、買って来てもらわなきゃ」

信平「そうだな。そうだけど、紀子さんがするよ、それも」

み緒「お昼ご飯、まだですか」

信平「え」

み緒「お昼ご飯」

信平「さっき食べたよ」

み緒「あら、え、食べました？」

信平「うん、食べた。食べたよ」

み緒「そうかな」

み緒「食べてませんよ」

信平、新聞を読む。

み緒「お茶もわかせますね」

信平「うん？ああ、そうだね」

み緒「お茶、いりますか」

信平「いい」

み緒「お菓子、くらい出さないと」

信平「うん？」

み緒「和尚さま」

信平「ああ。まだ、先のことだよ」

信平「みそ汁くらいあたためられるな」

み緒「え？」

信平「そこで。いいの買って来てくれたよ。電気でなんでもできるっていうんだから」

み緒「ああ」

信平「みそ汁くらいあたためられるだろ」

み緒「みそ汁、食べましたかね、私たち」

信平「食べたよ」

み緒「食べましたか」

信平「うん、食べた。さっき食べた」

信平、新聞を読む。

み緒「よっこいしょ」

信平「なんだ」

み緒、ダンスの並ぶほうへ。

み緒「これは、あなたのダンスですか」

信平「うん」

み緒「これは、私のダンスですか」

信平「そうそう」

み緒「これは洋服ダンス。これは、おばあちゃんのダンスでしょ」

信平「そうだ」

み緒「ダンスばかり並びましたね」

信平「むこうじゃ使わないって言うからさ。運んだんじゃないか」

み緒「そうでした」

信平「浜野さん親子に頼んで」

み緒「ああ、そうでしたそうでした、築山の灯籠のときも浜野さん親子でした」

信平、新聞を読む。み緒、立っているのです。

信平「なに」

み緒「え」

み緒「窓、は、どこにありましたっけ」

信平「窓は、だから、この向こう、ダンスのあっち側」

み緒「そっかそっか、なんだか、暗いから、目が悪くなったかと思いました。そうでした、窓、そっちにあったんです」

み緒、また椅子にすわる。

み緒「富士山に登りましたね」

信平「昔ね」

み緒「ええ、昔、登りました」

信平「まだ、肇も生まれる前だ」

み緒「新婚旅行でした」

信平「写真があるよ」

み緒「ありました？」

信平「あるある、そりゃあるよ」

み緒「あるなら、見たい」

信平「あるって、今度、探しておくよ」

み緒「母屋ですか」

信平「いや、こっち持って来たはずだよ、アルバムとか全部」

み緒「そうですか」

み緒「じゃ、そのうち出て来ますね」

信平、新聞を読む。

み緒、テレビを見る。

み緒「あら、ほらほら、青山学院、優勝ですって」

み緒「ああ、そうそう青山学院は、竹田の下の子が行きませんでしたか」

み緒「行きましたよ、確か」

信平、新聞を読むのやめ。おおきくため息をつく。

信平、立ち上がり。

なにを思ったか、ダンスを動かそうとする。

み緒「え、なに。ちょっと、なんですか」

信平「いや、あまりにも、壁一面、ぴったりとね、きてるだろ、これ」

み緒「腰。あなた。腰、おかしくしますよ。……どうするんですか」

信平「これはだって、なんにも入ってないんだから、どうせつかわないよ。一つくらいこうして
たっていいわけだから」

み緒「いやいや、それはおかしいですって。いや、それはないですよ、そんなの変です」

信平「いいよいいよ、誰も見やしないよ」

信平、一つのダンスを横向きに動かす。

み緒「やっぱり、変ですよ」

信平「うん。そうだな」

信平「……ほら、窓がある」

み緒「ほんと」

信平「梅が咲いているよ」

み緒「ええ」